

「Shyness の社会学」序説

萩 野 達 史

1 はじめに

対面的に状況において人はいかに振る舞うべきなのか？いかなる態度や反応が期待されているのか？こうした“自省的”な問いは、日々生活する者にとって、あまり意識にのぼらないこともあるだろうが、逆にひどく重要になってしまいうこともあるだろう。そして、社会や文化を研究する者にとって、期待される振る舞い方とその変化、あるいは振る舞い方についての人々の“自省”の程度やその変動は、非常に興味深いものである。

研究者が関心を持つ理由は多々あろうが、一つには対面的状況が有している秩序の性格がいかなるものであり、それがいかなる振る舞いや配慮によって維持されているのかを知ること、このことに関わる問題意識があろう¹⁾。互いに表情を読み取りながら直接声を交わす対面的なコミュニケーションは、様々なメディアが開発されることで、社会関係を形成する条件としての比重を相対的に減じてきているかもしれない。しかし、日々の生活を営み、様々な課業を遂行する上で、対面的なコミュニケーションが果たす役割は依然として大きいことは論を待たない。

したがって、行為者の水準からみれば、対面的な相互行為の場へ参加できるのか、参加しえたとしてもそれはどのような形において可能であるのか、そうした問題はその行為者の生存、あるいは実存にとって根源的な事柄である。あるいは、「社会システム」の水準からみても、その作動が煎じ詰めれば無数に発生し再生産される出会いの場、つまり対面的コミュニケーションの発生と継続に大きく依存していることは指摘できよう。それゆえに、対面的な相互行為に

¹⁾ この関心をもっとも直裁に探求した代表的研究であり、少なくとも社会学における関連的諸研究を触発し続けたものとして、Goffman (1963=1970, 1963=1980, 1967=2002)などを挙げる事ができる。

において期待される振る舞いの様式を記述することは、その社会を可能とする機序として、統合のメカニズムを理解することにもなり、同時に、ある人々を排除し周辺化するメカニズムについて分析することにも繋がるわけである。

さて、こうした対面的相互行為についての社会的期待・ルールを分析する方法もまた多様であろう。本稿では主として特定の態度傾向についての社会的なまざし——期待や評価——を歴史的に検討する方法に注目してみよう。その態度傾向とは、“shy”である。ランダムハウス英語辞典では、「恥ずかしがりの、はにかみ屋の、内気な、引込み思案の」といった日本語に翻訳された意味が挙げられている²⁾。そして、こうした対面的状況における“消極性”、あるいは対面的状況自体を回避する傾向に対して、アメリカ社会（北米社会）はどのような意味を付与してきたのか、そしてそのことはいかなる社会的機能を有してきたのか、先行研究によって明らかにされた部分を整理していきたい。

ではなぜ、“shy”あるいは“shyness”についてのアメリカ社会におけるまざしを殊更に取り上げるのか？この点は、3節以降の議論によって明らかにされるところであるが、2つほど理由を示しておこう。第一に、コミュニケーションをめぐる、日本社会の関心のあり方が、近年、顕著に変化してきたことが背景的な関心をなしている。とりわけ、若年層が今後生きていく上で、職業に関わる公的場面において、かつまた恋愛等に関わる親密な関係において、何よりも求められるのは“コミュニケーション能力”あるいは“コミュニケーション・スキル”であるといった主張が、その変化の内容を端的に示していよう³⁾。その能力やスキルに含められるのは、自己の提示や意見の説明に関わる側面であり、さらに同時に傾聴に関わる側面が含められることもある。

ただ、その内容がどうであれ、積極的に対面的状況に参加する態度が、そして好印象を与えるために洗練された振る舞いになしうることが、共約的な前提として求められている。こうした主張の“事実の妥当性”は、まさにこうした

²⁾ shyの語源としては、形容詞では「驚き（こわがり）やすい」であり、17世紀中期には動詞として「おじける」という意味があったことが指摘されている（寺澤芳雄代表編集『英語語源辞典』研究社より）。

³⁾ こうした傾向を、たとえば企業で求められる人材像についての言説や教育分野などに関わる政策的提言のなかで確認したのもとして、たとえば本田（2005）がある。とくに恋愛に関わる局面で、男性において、学歴・職業的地位・経済力など以上に、「コミュニケーション・スキル」が重要になってきたといった議論は宮台真司氏などが各所で展開してきた。また、そうした変化を語らずとも、たとえば喫茶店で2～3時間は会話を続けられることを、関係性としてではなく、基本的に求められる能力（恋愛対象となる「資格」をもつものとしての）として語るものは顕著に多くなったように思われる。

コミュニケーションに関わる“尺度”の構築に依存するところも大きい。そのため分析的な態度として求められるのは、対面的相互行為への／での積極性を強調するような言説的状况自体の存立条件や機能について検討しておくことであろう。その目的に対して、逆に、対面的場面での消極性を示す shy / shyness への社会的評価やそうした傾向を示す行為者への社会的処遇に注目することは有効な視角であり、その評価や処遇に大きな変容を示してきたアメリカ社会の経験はきわめて興味深い観察対象といえる。

第二に、“問題化”さらに“医療化”に関わる側面が上げられる。5節で詳述するが、70年代後半に shyness が心理学の研究対象として取り上げられ、80年代には、対人関係への消極的態度、あるいはコミュニケーションを回避する傾向についての広範な対象領域を構成するようになる。これが“問題化”の時代だとすれば、90年代中期以降、顕著になるのは、かつて shyness として捉えられた行動傾向が、社会恐怖(social phobia)あるいは社会不安障害(social anxiety disorder)として、精神医療の治療対象として、つまり“病理”として把握されるようになった動向である。

こうした趨勢は、もう一つの大きなテーマと関係する。それは、対人関係への積極性が強調されることの機能や含意を考察するという視角に収まる問題ではなく、日常的な相互行為がとくにメンタルヘルス専門領域で生産される評価的まなざしのなかで規範的に再構成されていく、その社会的力学や趨勢を明瞭に示しているからだ。より正確に言えば、相互行為場面における振る舞い・儀礼についての変容と、生活諸局面における“標準性”を構成しつつ“逸脱性”を一定の方向から解釈し対応するメンタルヘルス領域との相互的な影響関係を検討していく上で、“Shyness”の問題は一つの事例研究を提供しうるものと考えられるからだ。

2 Shyness の社会学へ

2.1 多様なアプローチの可能性

上述のように、“shy”として規定された一定の態度傾向がある時期から「神経症」や「障害」として見なされるようになったという記述は既にして、本論が一定の認識論に立ったアプローチを採用していることを意味する。しかし、“shyness”という概念をめぐる展開されうる社会学的研究のスタイルは多様であり、それぞれのスタイルには固有の可能性と限界がある。未だ研究蓄積が

精神疾患の社会的アプローチ

症状の性質

説明の対象	文化に依存しない	文化に依存する
当事者	I . 原因論的	II . 社会学的心理学
反応者	III . 社会的反応	IV . 社会構築主義的

Horwitz (1999) p.59 表 4.1 より

ほとんどない状態であることを鑑みれば、他のありうるアプローチについても言及することで、今後の研究がよりふくらみと興行きをもつための布石としたい。

Horwitz (1999) は、精神疾患 (illness)・障害 (disorder) についての社会学的研究が、大きく分ければ4つの分析視角に整理しようと論じており、shyness に関するアプローチについても、この議論がひとまず参考になるだろう。彼は2つの分類軸を用意する。一つは、症状 (symptoms) を文化依存のものと見るか否か。つまり、ある症状が発現するのは、ある時代・社会における文化的条件やその変動が理由となっていると考えるか否か、である。もう一つは、説明の対象をその症状を呈するとされる人びと、つまり当事者集団にするか、あるいはその人 (人々) や症状に対して反応する人々、つまり社会的反応の側にするのか、という分節の軸である。

第Iの類型である「原因論的」説明は、支配的な精神疾患の定義を受け容れた上で、その個人における精神的攪乱の社会的原因を探索するタイプである。第二の類型は、文化人類学あるいは歴史学の研究においてより多く見られる研究スタイルであり、諸個人に現れる症状が、特定の社会・歴史的な文脈の文化的産物であることを説明するものである。どちらも、症状の社会的原因を扱うものであるが、精神医学的症状が文化的文脈と独立的に生じると考えるか、それとも文化的産物として考えるのか、そこに違いがある (Horwitz 1999:57)。たとえば、「鬱病」それ自体は、精神医学的定義に準拠して捉え、どのような社会的地位・属性 (階層、人種、性別、年齢など) がその症状の発生率と関連が大きいのかを調べるのが、「原因論的」アプローチである。社会的資源の保有状況によって、精神的困難の回避可能性が変化することなどが検討される⁽⁴⁾。発生率は社会的・文化的要因が影響はしても、疾患や障害自体の基本的性格にはそれ

らの要因が影響するとは仮定しない。

それに対して、第Ⅱ類型の視角では、症状自体が文化的に特有な社会化のパターンや感情表出の適切さに関する規範から発現すると考える。ここには、何らかの苦痛もまた文化的にパターン化された方法で表出されるという議論も含まれる。5節で触れる De Swaan (1981) の広場恐怖 (Agoraphobia) も典型的だが、“ヒステリー”についての歴史文化的研究もその一つである。後期 19 世紀のヨーロッパにおける抑圧的な性習慣やその当時の精神医学における診断方法が“ヒステリー”という症状を生み出したと考えるわけである (Horwitz 1999:63-65)。

第Ⅲ類型は、精神疾患についての医学的な定義についてはとくに問わず、そうした症状に対する社会的反応のバリエーションを研究する。第Ⅳの類型は、反応する側の文化的構築から離れては精神疾患にいかなる重要性も認めない。精神疾患はあくまでも社会的定義であるとみるからだ。第Ⅲの「社会的反応」研究では、精神疾患の性質についての問題は括弧に括るか、疾患が実体として存在することを前提とした上で、社会的諸属性や時代・社会によって、その症状への反応の強度、反応の仕方に変異があることを明らかにする。その上で、その変異を生み出した社会・文化的背景を問題にしていくことになる。たとえば、何らかの支障があったときに、女性は男性よりも心理的側面に原因を帰属する傾向があり、メンタルヘルスの専門家をより適切な治療エージェントと見なしやすいといった研究 (Horwitz 1987)。あるいは、統合失調症は発生率やタイプにおいて社会横断的な類似性が見られるものの、社会的な処遇やそれによって変わってくる発症後の経過には、その社会の文化によって相当の相違が見いだされるといった研究などが、この社会的反応研究に含められる (Horwitz 1999:66-67)。

しかし第Ⅳの社会構築主義的研究では、精神医学的症状が諸個人に内属する特性であるという見方そのものに挑戦する。第Ⅲと第Ⅳの研究スタイルの相違は、社会問題論における構築主義的アプローチにおいては、存在論的ゲリマンダリングの問題としてなじみ深いものであろう。社会的反応研究では、なんらかの「支障」や疾患・症状が実体として存在し、それが一定の水準であることを前提にした上で、社会的反応だけが独立的に変化すると論じることが多い。しかし、その前提となる症状やその発生率についての「水準」の認識は、「社会的反応」こそが、なにものかの社会的評定や処遇を規定するという立場に立つ

④ Horwitz (1999) の中ではとくに紹介されていないが、たとえば、Brown=Harris (1978) の『鬱病の社会的起源：女性における精神医学的障害の研究』が典型的である。

のであれば、ひどく一貫性に欠けた議論であるという批判が可能だ⁶⁾。そこで、なにものかを“疾患”“障害”とみなすこと自体の文化依存性、あるいはなにものかを“逸脱性”“異常性”の側にカテゴライズすること自体の文化的恣意性を、社会過程的に明らかにする研究スタイルがありうるわけだが、それが第Ⅳのスタイルである。主要な研究例としては、ホモセクシュアリティやPTSDといった特定のカテゴリーが、いかにして精神疾患の“公式的”なカテゴリーとして専門家から認知を受けることに成功したり、失敗したりしたのかを精緻に検討したものが上げられる。あるいはメンタルヘルス専門家が精神疾患を定義し管理する権威をいかに正当化しているのかを示した研究もある(Horwitz 1999:68-70)。

2.2 Shyness に関するライフコース論からの研究

上述の Horwitz (1999) の議論にみるように、Shyness についての社会学研究は多様でありえるが、現時点ではごく限られた視角から、さらに少数の研究がなされているにとどまっている。3 節以降で紹介・検討する、構築主義的（より厳密には社会的反応）立場からなされた McDaniel (2003) の研究以外で、筆者が見いだしたのはライフコース論における二つの研究に限られた。子ども期における性格特性や“能力”が後のライフコースに与えた影響を考察する下位領域に属する研究である。Elder (1974 = 19) の『大恐慌の子どもたち』でも一部扱われているが、Clausen (1991) の competence 論、Shanahan (1997) の agency 論などが主要なものといえよう。Shyness についての研究は Horwitz の分類からみれば、Shyness が被説明項ではなく説明項なので、原因論的とはいえないが、認識論的立場からいえば、その範疇に入るだろう。また、こうした研究は、ライフコース論としても重要であろうが、本稿の文脈でみると、むしろ shy であることについての“まなざし”、端的には「不安」を明確に言語化し、その妥当性を検討したものとも考えられ、興味深いものである。

Caspi, Elder and Bem (1987) は、子ども期の“怒りっぽさ”(ill-temperedness) が、将来的にその人を低い地位につけ、不安定な職業生活や結婚生活を送らせる傾向があることを計量分析を通して明らかにした。その彼らが次に行ったのが、shyness についての分析であり、アメリカ社会において子ども期の shyness が、彼ら／彼女らの将来的な家族形成の時期、親なりの時期、定職へ就いた時期、職業的安定、地位達成などに与える影響を検討したものである(Caspi, Elder

⁶⁾ こうした“構築主義論争”については中河 (1999) に詳しい。

and Bem 1988)。彼らはこう考えた。shy な子どもは社会的知識と技術を成長させる上で重要な、役割と規則についての交渉経験を多く持つことがない。そのため新たな社会関係への参入時期は遅れやすく、参入しても必要な自己主張もなされないためにそこでの評価は受けられないことにもなりやすいと (Caspi, Elder and Bem 1988:824-825)。

この研究では、1920年代末にカルフォルニアで生まれた男性 87 名、女性 95 名を対象にしており、彼ら/彼女らは 40 歳ぐらいまで追跡調査に応えている。とくに Shyness のレベルは次のように測定された。調査対象者が 8～10 歳まで年に一度、母親への対面式インタビューが施行されており、このインタビュー・データを後に開発された Shyness と Excessive Reserve (過度の自己抑制) に関する尺度に照らして検討し、対象者に相応の得点を与えている。shyness についての尺度は、5 段階で、1 = 「非常に容易にそして素早く社会的接触をしており、新たな人びととの出会いを楽しんでいる」、5 = 「社会的状況で、パニックになるほどまでに激しい不快感・不安を感じている」といったものである。

Reserve についての尺度は、1 = 「統合された感情を自発的かつ抑制せずに表出する」、5 = 「他者という際、緊張やぎこちなさの感覚を生む感情的な抑制がある」となる。この二つの尺度を合成して 5 段階化し、点数が高いほど Shyness の傾向が強いとする。8～10 歳までの 3 回分の得点を合計し平均したものがその対象者の Shyness レベルとなる。Shy / Non-Shy のグループに二分する場合には、平均値が 3 以上が Shy グループに帰属させる基準となり、その結果、男性の 28%、女性の 32% が児童期に Shyness の傾向があったとされる (Caspi, Elder and Bem 1988:825-826)。

分析の結果を男性についてみると、Shy グループは Non-Shy グループに比べ、平均して約 3 歳は結婚が遅く、約 4 歳は親なりが遅く、約 3 歳は定職に就くのが遅いとなった。パス解析を通してみると、定職へ就く時期と職業的地位達成 (中年期における地位達成で、非熟練雇用から上級管理までの 7 段階)、および職業的安定性 (30～40 歳時における失業期間の長さ、転職回数などによって得点化) との関連 (どちらも有意な負の相関) が強く、そして Shyness レベルが定職へ就く時期との関連が有意に大きい (因果論的に推測すれば、その時期を遅らせる) ために、Shy であることは地位達成などに負の影響をもたらすと推測される。女性については配偶者の社会的地位との関連が分析されており、子ども期に Shyness 傾向を示したグループの方が、より職業的地位の高い配偶者と結婚していることも知見として指摘されている (Caspi, Elder and Bem

1988:826-829)。

この Caspi らの研究と比較することを目的の一つとしたのが、スウェーデンにおける Shyness のライフコースへの影響を測定した Kerr, Lambert and Bem (1996) である。彼らの狙いは、Shyness についての社会的まなざしが異なる文化的環境においては、少なくともアメリカほど否定的に Shy であることを評価しない文化を有するスウェーデンでは、Shyness の影響はさほど否定的な影響を持たないであろうことを検証し、性格傾向の影響が文化依存的事であることを示すところであった (Kerr, Lambert and Bem 1996:1100-1101)。彼女らの研究では、ストックホルム郊外で 1950 年代中期に生まれた男女について 35 歳時点まで追跡した。その結果、分析対象となったのは男性 63 名、女性 48 名となっている。アメリカの研究と同様、8～10 歳時の shyness 傾向を母親の評価にしたがって測定している。ただし、年に一度、「あなたのお子さんは見知らぬ同年代の子どもに対して shy ですか?」、そして「見知らぬ大人に対しては…?」という質問に対して、4 段階 (まったくない～いつも) で回答を得ている (Kerr, Lambert and Bem 1996:1101-1102)。

その他尺度については省略するが、結果は、まず男性についてみると、初婚年齢・親なりが Shy グループの方でより遅くなっているが (3～4 歳程度)、教育達成 (義務教育段階から大学 3 年以上の 6 段階)、そして職業的地位達成についてみると Shy / 非 Shy グループ間で有意な差は認められなかった。女性についてみると、Shy グループの方が教育達成において有意に低くなり、また Caspi ら (1988) の結果とは異なり、Shy / 非 Shy が配偶者の地位 (収入) と関係することはなかった (Kerr, Lambert and Bem 1996:1102-1103)。Kerr らは、男性について教育的・職業的達成に差がないのは、スウェーデンでは shy であることに価値を置いており、強引さを好まない文化的条件があり、とくに教育期間には shy なタイプをサポートするシステムがあるという (Kerr, Lambert and Bem 1996:1104)。これはつまり、女性についてはそのシステムが作動していないことを意味するわけであり、McDaniel (2003) がアメリカ社会について指摘したのと同様に、スウェーデンにおいてもジェンダー別に適用されるルールが異なることを示唆するものだ。

同時に、男性において shyness を肯定しつつサポートするが、女性においては否定する、ないしはそうした態度傾向が“得にならない”という意味では、両社会では逆の規範が働いているようにも思われる。ただし、アメリカの研究では、対象者が 30～40 歳を 1960 年代に過ごしたことに対して、スウェーデン

の研究では、対象者が90年代初頭に35歳になっているという時代的差がある。したがって、時代的に生じているであろう文化的変化も踏まえた上での慎重な解釈が求められる。なにより、関連的な規範や教育現場あるいは職場について、両社会の資料データを持ち合わせていない状態で、これ以上の解釈は禁欲すべきであろう。

3 Shyness 言説の歴史的変遷

3.1 McDaniel による言説研究

1節で述べた、相互行為場面における振る舞い方についての期待・規範の変化についての、あるいはその変化とメンタルヘルス専門領域との関係についての関心からみれば、shyness に関わる言説的変遷を辿った、McDaniel (2003) の研究は非常に貴重なものである。本節では主として彼女の議論を整理しつつ紹介していこう。

Patricia A. McDaniel は2003年に『はにかみ屋と臆病者～1950年代から90年代のアメリカにおけるシャイネス、権力、親密性～』と題する研究書を著している⁶⁾。Shyness についての言説を感情文化、あるいは感情規範・規則として捉え、その時代的な変化を記述しつつ、変化の条件とその時々と言説(感情規則)が有した“潜在的”機能を分析したものである。McDaniel は、とくに、Shyness についての言説、つまり感情規則はすぐれてジェンダーに関わるものであり、そこに見られるジェンダー間の権力格差(とりわけその発言力と感情労働コストの配分に現れる)は縮減されることもありつつ、概ね保持・再生産される側面を残してきたことを指摘する。

また本書は、このテーマに即してきわめて興味深いデータに基づくものである。McDaniel 自身による説明に詳しいが、アメリカ社会では自助本(self-help book)、つまり経済的成功を主とするが、その他、精神的安寧の獲得や親密な関係の獲得・維持などに関わる指南書が実に植民地時代から今日に至るまで膨大に発行され続けている。そしてこうした本は生活諸局面での身の処し方、とくに対人関係における立ち居振る舞いに言及することも多く、相互行為場面で期

⁶⁾ 原題は“Shrinking Violets and Caspar Milquetoasts”である。Milquetoast(あるいはCaspar Milquetoast)は米・カナダにおいて臆病者、腰抜けを意味するが、ランダムハウス英語辞典によると、「米国の漫画家 H.T.Webster(1885-1952)の連載漫画 The Timid Soul中の人物Caspar Milquetoastの名にちなむ」という。

待される振る舞いや感情の統制の仕方についての言説を分析する上で、格好のデータとなるものである⁷⁾。

多少説明を加えれば、1945年には15歳以上人口の10%程度が調査時点の前一ヶ月間に自助本を読んでいたが、83年には半年に少なくとも一冊は読んでいる人が54%という統計データがある。読者の構成としては、男女差はあまりなく、白人の高学歴・高収入層が多いことも判明している。また一般的な受容のされ方についても研究されており、たとえば、書かれていたことをそのまま日常生活で実践するというわけではないが、トラブルに合ったときに読み直すことも多いといったことが指摘されている。つまり、自助本は一定の信頼をもって参照されている部分もあり、ある種の感情規則を伝達し、再生産する効果的な装置ともなっているのである (McDaniel 2003:134-136)。

より一般的あるいは支配的な言説を捕捉するためのドキュメント分析の常であろうが、サンプリングは内容的適合性と流通量との二つの観点から行われる。「自助本」としてリストが存在するわけではないので、様々なキーワードでの検索を繰り返し試みながら、実際に適合性をチェックするための書籍リストを作成する。次いで、流通量の観点から選択を行う。しかしこの段階はさらに困難がつきまとい、工夫が必要とされる。販売部数や発行部数は過去のデータがないというばかりでなく、多くは出版社が開示しない。そこで McDaniel は改善の策として、図書館向けの業界紙で取り上げられていること、版数が2版以上であること、こうした基準を適応しながら絞り込みを行った。こうした作業の末、1950～60年代では37冊、70～80年代では60冊、1985～95年では94冊の本がサンプルとして選ばれた⁸⁾。この研究書は社会学における主要な学術雑誌の一つである *Social Forces* の書評で取り上げられ、とくにサンプリングについての方法論的厳密さについては、評者が高く評価している (Eller 2005:1306-1307)。

さて、以下では McDaniel が、こうしたデータに依拠しながら展開した、shyness 言説についての議論を章に即して紹介していこう。自助本に基づく本格的な検討に入る前に、植民地時代から1940年代頃までの言説的変遷を概観しているが、それ以後は、白人中流階級の異性愛関係における shyness 言説、職場における

⁷⁾ 実際、経済社会学者の Biggart (1983) は、アメリカ社会の職業的場面における合理化と自己統制についての規範的変化を、やはりベストセラーとなった自助本にもとづき分析している。

⁸⁾ 自助本は、多く白人中流階級を対象としたものである。そのため、マイノリティに向けられた自助本は数が少ない上に、流通量の面からもサンプルとして残り得ない。そこで、内容的適合性を基準として「黒人読者」に向けて書かれた自助本と雑誌記事を別枠で選び出し、50年代から95年までの期間で9つをサンプルとしている。

言説、友人関係における言説などを順次検討している⁹⁾。

3.2 植民地時代から20世紀前半まで：固定的階級社会とその動揺

この期間については、「感情」についての歴史的研究をレビューした性格が強く、McDaniel 自身の議論というわけではないが、しかし shyness に限らずとも感情規則の変化がどのような社会的変動と関連的であるのかを考える上で重要な示唆を与える部分でもあるので簡単にまとめておこう。この章から読み取れるのは、shyness あるいはそれに類似的な性格・態度傾向が肯定されるのは、“従属”的立場であることが求められることによる。

この時期のキーワードとしてまず取り上げられているのは、meekness であり、植民地時代の階級がより固定されていた期間、男性においても、「柔和であること」「控えめであること」は否定的な事柄とはならなかった。ときに assertive であることを求められはしたが、階級秩序を攪乱する性向は忌避されたといえよう。このような時代、女性への圧力は苛烈であり、その言語的な自己主張は社会秩序の脅威として認識され、“悪態”をつく女性が裁判にかけられ、罰金やむち打ちの対象となった (McDaniel 2003:31)。

男性について変化が生じるのは18世紀初頭である。個人の独立を強調し、固定的なヒエラルキーに疑問を付す、新教徒の信仰復活運動が展開され、西部開拓が盛んになる頃には、先取りの気性に含まれる大胆さや果敢さに価値が付与されるようになった。「西部になって男になれ」といった言葉が語られるようになったように、アメリカにおける“古典的”男性性が形成された時期である。

しかしながら、“行動”の傾向として、対面的な場においてあまり自らを主張しないことは、肯定的に評価されていた。Modesty (控えめ) であることは、reserve (慎み) として、timidity (臆病) や shyness とは区別され、大胆・果敢が価値化された傾向と矛盾しないかたちになっていた。「慎み」は戦略的な寡黙さ (reticence) や慎重さ (wariness) から構成され、白人中流・上流階級に属する男性の備えるべき徳性とされた。これは、内気さ (bushfulness) が下流階級に結びつけられたことと対応する。感情を制御してクールであり、落ち着

⁹⁾ 本稿では第4章の紹介を省略している。第4章は、「自己主張の強い女性と臆病な男性? : 人種、異性愛、シャイネス」と題して、アフリカン・アメリカンにおける shyness 言説を検討している部分である。白人による支配的言説においては、しばしば黒人女性は自己主張が強く (assertive)、黒人男性は臆病であるというステレオタイプが形成されてきた。こうした議論はきわめて重要であるが、本稿ではマジョリティの白人中流階級における言説的变化に限ることで、ひとまず議論を簡明にしている。

いた品行を示すことが権力と結びつけられていた (McDaniel 2003:32-33)。筆者なりに解釈すれば、shy な感覚を持つことは否定的なことであるが、表出レベルで「寡黙なこと」は、shy ではなく reserve として認識 (誤解?) される限り許容される、ないし望ましいとされるわけである。その意味で、印象操作は容易であったかもしれない。

その点、女性への期待はより複雑で振る舞いの操作はより困難であったと考えられる。当時の行儀作法書では、白人中流階級の女性において、shyness は“自然”なものとされた。つまり、感覚レベルでの shyness は期待されていたといえる。しかし、「ふさわしい男性を引きつける」ためには、愛想がよいことが望ましく、ごちない感じになることはこらえるべきこととされた。しかし、同時に、「男性の激情 (passion)」をなだめ先送りさせるために、慎み深くデリケートであること、なによりそう振る舞うことも期待された。本能であるといいつつ、演じ方を語る矛盾があるが、「恥じらいが魅力的」であるとされた。それは性的イノセンスの証左として演じられるべきとされ、男性を招き寄せる手段として位置づけられていた (McDaniel 2003:34-35)。この矛盾する二つの振る舞いを調停するのは、会話のトピックによる使い分けである。「知性を開示してしまう」話題であるときには、黙るというわけだ。このことは、本性として shy でデリケートである女性は、公的生活の乱暴で混乱した世界に耐えられないというレトリックと合わさって、公的意思決定に関わる社会空間に女性が参入することを阻害していたといえよう (McDaniel 2003:33-35)。後述するように、この女性の振る舞いに対する期待は 1950 年代においても見出せるものである。

しかし 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、男女ともに感じ方や振る舞い方についての規則は変動を経験する。McDaniel は、その背景については、官僚制の拡大と消費社会化などについてごく簡単に触れる程度であるが、自助本などでの自己の描き方には明瞭な変化が認められることが述べられている。Mills(1953 = 1957) の表現に従えば、それ以前は、“character”つまり、自己統制や自己犠牲を要素とする品性の点から描かれていたが、20 世紀初頭になると“personality”、つまり他者からみて魅力的であるという観点から描かれるようになったと。後者において重要なのは、言語的に売り込む能力である。とくに白人中産階級の男性は、あらゆる社会関係を始め維持する上で、言語的にスキルフルであることが求められた (McDaniel 2003:42-43)。

資料は限られるが、白人中流階級の女性についても、1920 年代には初めの性革命が起こり、参政権が獲得された時期であり、もはや臆病さや shyness は要

求されていなかったという。ただし、50年代に至るまで、こうしたまなざしは揺れ動いた。大恐慌のときには、再び shyness が求められ——McDaniel はこれは不況時の労働市場で男性と競合することを抑制するためだと解釈している——、逆に第二次大戦のときには、ヘテロセクシュアルな女性性を強調させつつ、大胆さや決断力あることを望ましいものとした。家庭外で働く労働力として期待されたからである (McDaniel 2003:44)。

3.3 異性愛関係における Shyness

3.3.1 1950年代

以降は、McDaniel が独自に行った、1950年代以降の shyness 言説を対人関係の領域ごとに検討した議論になる。上述した手続でサンプルとした自助本において、shyness がもっとも関連づけられる領域は異性愛関係であり、自助本の著者たちが提示するアドバイスは、いかに感情的な親密性を達成するののかについての支配的な思考を含意するものである。

1950年代の自助本の基層にはある種の二重性が見いだされる。それは、女性の能力と独立性を承認しつつ、異性愛関係においては男性の優位性が保持されるべきであるという論調である。それは「あなたは全てを手に入れることができるでしょう。あるいはもう手に入れているかもしれませんが。でも、愛と求愛、結婚は別のことになるでしょうが」といった表現に表れる。この二重性から生み出されるのは、演技としての shyness である。イニシアティブを男性がもっているような幻想を与えつつ、巧みに自己をアピールすることが肝要であり、デートの成功は「女の子」が shyness の仮面（無口、沈黙、従順さ）をかぶっていることに依存すると。こうした助言が含意しているのは、白人中流階級の男性がきわめて脆弱な存在であるということだ。この“弱い男性”を「立ててやる」ために、彼女たちは自らの才覚や知性を、そして巧妙さを shyness の仮面の裏に隠さねばならないということになる (McDaniel 2003:48-51)。

McDaniel は、しばしばこうした自助本の示唆する感情規則が必ずしも自助本の内部で完結しているのではなく、一定のリアリティをもっていることを示すために、その当時の意識調査を引いてくる。ここでは、50年代中期に行われた14～16歳の少年少女についての調査である。デートにおいて自分の社会的スキルに不安を感じており、改善の必要があると回答しているのは、少年59%に対して少女72%という結果ができています。これは、それだけ女性の側に振る舞いの微妙な調整、つまりは相手の感情に配慮した演技が期待されていたことの傍

証ということになる。

そしてこのことは、後にも再三現れる、感情労働における非互酬性の問題を示すものである。そして、とくに50年代の shyness に関わる感情文化は、ジェンダー間のヒエラルキーを再生産させることに寄与したと考えられるのである。

3.3.2 1970年代

1960年代には性革命と女性運動が展開された時期である。1970年代の後半になると、こうした社会的動向が自助本に顕著に反映されるようになる。それは、白人中流階級の女性の shyness を否定して、アサーティブ (assertive) であることを熱狂的に支持するものであった。だから自らデートに誘うのは解放された女性の証であるとも語る。

こうした劇的ともいえる変化は、セクシュアリティの位置価が変化したこととも密接に関連している。性に関わる体験や表現は良き人生の必要な要素であり、自己発見を達成するもっとも重要な手段であると考えられるようになった。shyness は感じるそれによせ、さらには後述する男性についての見方に生じた一定の変化もあり、演じるそれによせ、shyness は性的体験等から女性を疎外するものとみなされた。そのれゆえ、shyness は女性から自己知識の重要な源泉を失わせる、きわめて否定的なものとなった。自助本の著者によっては、shy であることは「社会的・性的な自殺である」とさえ書かれた (McDaniel 2003:54-57)。

こうした shyness の否定性は、より長期的な異性愛関係の形成においてもアサーティブであること、とくに自己開示的であることが重視されることになって、さらに強められることになった。50年代には、自らの感情は相手に対して表出してはならないものとされた。たとえば、結婚生活で生じた不満や怒りは、台所をわざわざ磨いたり草むしりをして、あるいは最後には燃やしてしまう手紙に書いて発散することが勧められていた。しかし、70年代には、親密な関係を長期にわたって形成し維持するには、自らの感覚や感情を言語的に表出し、相手に伝えることが不可欠とされるようになった。このことは両性に対して求められた。

この時期、デートにおいて男性はアサーティブな女性を好むものだとされるようになった。逆に、女性の率直な誘いに恐れをなす「愚かで弱い」男性には用がないとされた。そして shy な男性がデートをしないのは、性道徳的に“お堅い”からではなく、イニシアティブを取ることができず、かつそのことを恐れる臆病さゆえだとも解釈された。こうしてみると、男性においても引っ込み

思案な態度は否定的であらざるをえないし、上述の異性愛関係において求められていたように、自らの感覚や感情を語れないことはもっぱら否定的なことになるだろう。

ところが、男性についてみると、また別様の解釈装置が働く部分があったようだ。男性の沈黙は臆病さとしての shyness ではなく、20 世紀以前の節でも説明された reserve (慎み) として表現されることがあった。ただ、この reserve は以前のように、自己統制力の強さとして解釈されるのではなく、自己の表出があざけりをもって迎えられることへの恐れを意味した。それならば、やはり臆病さと同じとも取れるのであるが、reserve として表現されるときには、その恐れは、いわば“悪しき環境”からくるものであり、当の男性の内に帰属されない傾向が自助本にはみられたという。つまり免責されるのである。

では、その悪しき環境とはなにかといえば、“貧困なコミュニケーション環境”となる。そしてその“貧困”が、女性の側の問題とされる。そしてまた、その環境を改善する責任も女性の側に帰属される。たとえば、会話を途中で遮るのはダメ。よりできる男とくらべてもダメ。受容して賞賛してあげなさいと。実際はともあれ、自助本においては、会話を途中で遮ったり、比べたり、貶めたりすることが女性によって行われており、その環境が男性をして寡黙にさせるということになるのだろう。70 年代後半に、女性に関する shyness の意味づけは確かに変化し (否定的なものへと)、女性が感じ考えたことを語ることを容易にした。しかし、McDaniel がここで強調するのは、異性愛関係を維持するために必要な会話上の配慮、つまり感情労働の責任はやはり女性に任され、その意味での異性愛関係における権力配分の不平等性は保持されたということである (McDaniel 2003:57-60)。

3.3.3 1980年～1990年代中期

それでは、1980 年代から 90 年代の半ばにかけて言説的にはどのような変化が生じたのだろうか。よく知られている通り、女性運動あるいはそれが求めた社会変化の流れに対してはバックラッシュが生じた。新保守主義 (New Right) の台頭により 50 年代的“伝統家族”が称揚されるようになった。この時期、shyness をめぐる言説上の傾向として注意すべきは 3 つの点である。第 1 は、“伝統”回帰の主張が強まりつつも、白人中流階級の女性に自助本の多くが求めたのは、70 年代後半に引き続き、アサーティブであることであった点。第 2 に、男性における shyness は別様の言葉 (例えば reserve) に置き換えられることなく、

ある種肯定的なものとしても見られるようになった点。第3に、一部(約30%)の自助本は、自己開示能力については男性が“生物学的”に劣るという議論から、異性愛関係における感情労働の不均衡配分を強化する言説を再生産してきた点である。

第1の点についていえば、この性愛関係において、女性がアサーティブであること、自己開示的であることを望ましいとする前提は、たとえ“保守派”言説においても否定されなかったことが重要であろう(McDaniel 2003:64)。そして感情労働の配分という面から見ると、やはり女性の側が、男性の自信や女性に対する理解能力を高めることを求める自助本が多かったようである。ただ、ここに多少の変化が含まれているとすれば、70年代には男性側のイニシアティブを前提とする議論が多かったことに対して、80年代以降は必ずしもそうはなっていないことである。男性の自信を育てるという場合も、男がリードしているといった幻想を抱かせるためではなく、「あなた(女性)が欲するものを追うに必要な自信をもたせる」ため、という論理が語られていた。

この傾向と関連があるとはMcDanielはとくに論じていないが、男性におけるshynessが、「感受性が豊か」「愛すべき性格」として肯定的に評価されるようになったことが、第2の注意点である。この時期の自助本の18%にこうした議論が見いだされ、旧来型男性性としての攻撃性と対比し、女性にとっては安心・安全を予示するものと論じられているという。McDanielは、男性におけるshynessを慎みなどと言い換えずに、臆病さとしても肯定するということがもつ、旧来型男性性へのインパクトに注視している。

保守派の自助本(全体の30%)では、性格に関係なく、男性は“生物学的”に自己開示や感覚について語る手が苦手であるとされ、“生物学的”に得意な女性がリードすべきであるとされている。ただし、この種の言説では、“演じる”shynessは女性において否定されておらず、むしろ男性を“不安にさせて焚きつける”所作として評価されてもいる。そして、この点は、shynessが男性に対する知的劣位を演じるためのものとは既にされなくなったことを含意しているのである。80年代以降の傾向で、総じていえるのは、ジェンダー・イメージに一定の変化が確かに生じつつ、こと感情労働の配分という点では、それ以前の時代とさして変化がみとめられないということであろう(McDaniel 2003:60-65)。

3.4 職場における Shyness

3.4.1 1950年代

職場における shyness へのまなざしは、「成功」の方法論と「ジェンダー」によって規定される。50年代は、「成功」指南の対象になったのはもっぱら男性であり、成功方法論は、他者と調和し親しまれるパーソナリティの伸長にあった。ここにおいて、shyness へのまなざしは両義的なものとなる。以下その事情をみていこう。

この時期の自助本で成功の鍵とされるのは、教育の有無や職業上の技術ではなく、“性格要因”あるいは“人びとを扱う能力”とされ、本によってはその成功への規定力は60%とも90%とも書かれていた。大切なのは、愛想がよく、社交的であり、“感じのよい・愉快的な性格”(pleasing personality)であることだ。なぜなら、成功とは組織内の出世であり、そのためには、とくに雇い主や上司、そして顧客など、引き上げたり業績を伸ばすチャンスを与えてくれる人びとの好意や友情を獲得することが、なにより重要とされたからである。背景としては、白人の中流階級に属する男性の職場が多く大規模企業であり、とくにそのポスト補充方法が内部昇進に頼ることが一般的であったという条件が挙げられている。

こうした要請のもとで shyness が「禁止されつつ支持される」というのは、上司や顧客などに対して十分な感情労働を遂行する必要からだ。まず、服従的な(あるいは敬意を示す)沈黙 (deference quiet) が強調された。このことは上司などを喜ばせる。また、熱心さを示すことはよいが、過剰に熱心と取られると動機を疑われる。そこには抑制も必要だという指示もあるように、攻撃的な振る舞いよりもむしろ shy な態度が適当とされた。つまり、“演じるシャイ”は必要であり肯定されていた。

しかし、感情労働は、ときにより積極性をもった表出行動を必要とする。上司や顧客に対して、常に注意と関心を向け、ときに勇気づけ、(批判したい衝動を抑えて) 共感を示す、そうした惜しみない感情的サポートを与え続けなければならない。このためには、“感じるシャイ”、つまり、恐れとか臆病さは抑制しなければならない。shyness へのまなざしは、こうした二重性をもつものであった。McDaniel も指摘するとおり、これは異性愛関係において女性の shyness へ向けられたまなざしと同じ構造をもつ。

ところで、こうした相互行為における男性への要請(服従的態度)は、それまでの伝統的男性性(独立的・主導的態度)とは対立するものでもあった。実

際、それが成功するまでの過度的戦略であれ、服従的に振る舞う男性を「なさない」「小物である」とする批判もあった。しかし、McDaniel は、妻を専業主婦にしておけるだけの十分な収入を得ることによって家族を養うことができないことこそ、この階級の男性性を危機に曝すものであり、やはりこれもまた中核的な男性性を保持しようとする力学の結果であると解釈している (McDaniel 2003:83-89)。そして、“梯子を登る途中である服従的男性たち”でも、横暴に振る舞える対象が、職場において圧倒的なマイノリティである女性たちであった。自助本が就労する女性に指南したのは、職場から追い出されないためにもっぱら服従することであり、それが賢い振る舞いであるとされていた。

3.4.2 1970年代

この時期は、対象とされる読者に女性も含まれるようになり、「成功」方法論として男女ともに、言語的・非言語的なコミュニケーション・スキルが決定的とされた。ただし、50年代とその内容は大きく変化していた (McDaniel 2003:90)。50年代に求められたのは、相手を喜ばせることであり、優越感を与えることであった。しかし、70年代には、相互の「理解の最大化」が目的であり、そのためには意見や説明を明確に力強くいうこと、コンフリクトも避けないことが重視されていた。例えば、「誰かが間違えた指摘しろ！ 満足していないなら、そう言え！」と書かれていたりする。70年代は、異性愛関係におけるのと同様に、職場においてもアサーティブであることが強調されたわけである。

この背景として、70年代のアメリカは不況であり、内部昇進制が解体されたことが上げられている、経営トップが外部から雇われるように、従来のような上下関係に依存した「成功」は覚束ないものとなったのである。引き上げてもらえるのを待つよりも、自ら主張することが不可欠とされた。

こうした言説状況下では、shyness はやはり否定的なものとなる。“感じるシャイ”ばかりでなく、“演じるシャイ”も禁止の対象となった。shy であることは、人とコンタクトできないことであり、コミュニケーションを発生させない。それはハンディがあるというよりも、「完全に駄目な人間」(total disaster) とさえ表現されることもあった (McDaniel 2003:91)。

女性に対しては、とくにフェミニストである著者による自助本では、shyness を伝統的女性性として拒絶し、アサーティブネスを採用することを訴えた。そうした幾人かの著者は、自己提示のスタイルこそが権力の多寡を規定すると説明した。たとえば、会議の途中から入室したときに、「まっすぐに顔を上げて部

屋を歩き、話し手に近い椅子に座り、自己紹介をすぐに行い、ゆったりと座る」、こうした所作そのものが力を生むわけである。こうした議論は、ジェンダー間の不平等が相互行為場面における振る舞いによって生産・再生産されるという社会学的理論のある立場と通底する (McDaniel 2003:89-94)。

3.4.3 1980～90年代中期

70年代のアサーティブの強調に対して、80年代以降は、「強迫的でない、快適で敬意あるコミュニケーション環境を作り上げることが成功に導く」といった議論が優勢になってくる。理解を重んじること、そして職場内コミュニケーションにおける対等性を重視することは70年代と同様である。しかし、その理解の仕方は、「知的」にではなく「感情的に深く」理解することが課題とされた。そこで鍵とされるのが、「共感的傾聴」(empathic listening)である。傾聴を通して相手の準拠枠を理解し、そこから物事をみることが重要とされる。

この構図のなかで、shynessは非常に否定的に評価されることになったという。まず、感覚のレベルでshyであることは、自意識過剰になることであり、相手の話を聞くよりも、自分が次に話すことに気を取られることになる。結果、傾聴から理解にいたることを阻害する。そして、黙っていることもまた傾聴を阻害する。聞くには適切に声をかけていくことが必要であるが、それができない。自助本を検討して、McDanielは、この時期の著者たちは、shynessをリハビリの対象とするよりは、撲滅することを意図しているようだと言及し、それは(本稿では後述する)製薬会社のアプローチと同様であると述べている(McDaniel 2003:98)。

また、この傾聴主義は、ジェンダー間の感情労働の配分という面で一定の変化をもたらすが、そこにもまた注意すべき点がある。まず、男性もよき聞き手となることが成功するために求められるという点で、感情労働が、異性愛関係におけるのとは異なり、免除されない。しかし、職場で実際に「聞く」という労働を男女が同様に行った場合、男性の方が高く評価されやすい。なぜなら、「聞く」ことは旧来から女性の役割とされてきたので、女性が遂行してもさしたる感情労働をしていないと認識されず、男性がやるとかなりの「労働」をしていると認識されるからである。McDanielは、実際にこのために昇進や昇給の面で格差が生じているという、Valian (1998)の経験的研究を引きながら、男女ともに適用される共感的傾聴主義は、その表面的な平等主義とは異なり、むしろ社会的資源の配分に格差をもたらす見えにくい装置にもなっていると指摘する

(McDaniel 2003:98-99)⁽¹⁰⁾。

3.5 友人関係における Shyness

3.5.1 1950年代

男女ともに、50年代は、友人関係を形成し維持するには、相手と合わせる事が重要であり、よい気分させることが原則とされた。いわば「相手本位主義」であり、相手に対して感情労働をすることが求められた。そして、shyness はそれを妨げるものとして認識された。shyness とは自己中心性の一形態であるとみなされたのである。その自意識は無私の感情労働を不可能にすると。

しかし、その一方で、shy である場合、ある抜け道があった。すでに論じてきたなかにもしばしば出てきたように、ある種の態度が別様の概念で解釈され、かつその概念が望ましいとされる場合である。50年代は、たとえば無口であり、自己の意見を述べないことが、振る舞いの理想型としての控えめ (modest) であることと解釈される余地があった。この見分けはきわめて困難である。shyness を否定する自助本の著者たちも、実際に shy と modest を識別する基準を示していたわけではなかった。McDaniel は、この曖昧さによって、shy な人びとのいくらかは modest としての利益を享受できたかも知れないという⁽¹¹⁾。

この控えめであることと関連するが、友人関係で許されざることとは、個人的なトラブルや私的な秘密を相手に開示・暴露することであった。ただし、こうした指摘のある自助本もあるが、大半は自己開示について触れられてさえないなかった。実際、50年代の調査では、友人に助けを求める人はほとんどいないという統計結果がでている (McDaniel 2003:107)。

3.5.2 1970年代

この時期、50年代の自己を抑圧する傾向とはまったく逆に、自分について語る事が、自助本において強く命じられるようになった。自分の感情・目的・

⁽¹⁰⁾ また、McDanielは、ジェンダーに限らず、白人中流・上流男性の部下一般に対してもつ構造的な権力の差異 (たとえば給与面で現れる) が、平等主義的な、あるいは感情開示的な振る舞いによって、低減されているかのように演出することで、「快適なコミュニケーション環境」が作り出されていることを批判的に指摘している (McDaniel 2003:99)。Collins (2004) もまた、階層構造における諸資源の不平等配分が、70年代以降拡大している一方で、相互行為場面での平等主義的儀礼が励行され、支配的になっていることを指摘している。

⁽¹¹⁾ 当時の自助本が、modestをことさらに強調したのは、ヨーロッパからの移民に白人中流階級の振る舞いを教化し、その優越性を正当化することを目的としていたことによるという (McDaniel 2003:105-106)

態度・秘密・困難といった事柄を話して、相手に知ってもらうことが、より強い長続きする絆を生むとされた。より深く感情を伝える能力こそ友人関係の基盤とされたのである。自己開示がもっばらの戦略であり、「聞く」よりも「話せ」と勧められた。

shyness への評価であるが、それは自己開示を妨げるものであり、その結果、孤立し鬱状態をもたらすものとされた。そして注意すべきは、modest であることがもはや価値を付与されなくなったことである。語らないことは、単なる shy な所作であり、ただ否定的なことではかありえなくなった。そのため、友人が欲しければ、shyness を治療せよといわれることになる。

70年代では、自己開示についての男女差を“生物学的本質論”に結びつける議論はみられない。ただ、ホモ・フォビアや競争意識などから、男性は魂を相手に曝すことが難しいという話しは多かった。当時行われた統計調査では、若干女性の方が高いものの、男女ともに自己開示的に振る舞う傾向が確認されている。

3.5.3 1980～1990年代中期

80年代以降も自己開示は相変わらず重要な要素であった。自己開示ができないことは、身体的・精神的健康を損なうものであるといわれた。このことは90年代半ばに顕著となる shyness の医療化を予示している。しかし、自己開示が手放しで称揚されていたわけではない。他者への批判は控え、むしろ肯定的に評価する発言を含めるべきと指南されるようになった。

強調されたのは互酬的な感情労働であるが、shy な人は他者へ過度に依存的であるという理由づけによって、shyness は他者への感情労働の遂行を妨げるものとして捉えられた。とくに shy であると友人の数が少なく、その友人にしがみつ傾向もみられ、その結果、友人の方がバーンアウトするともいわれた。そうしたことは shyness の自己中心性を示すものとされ、より積極的に交友関係を広げるよう指南されていた。

バックラッシュが生じたこの時代、人関係における感情労働の能力に男女差があるとする議論がやはり30%の自助本にみられた。女性を「熟達した心理学者やカウンセラー」とみなす一方で、男性は本質的に自己開示や他者への配慮や労りができないものとされた。その結果、女性に次のような指南がなされる。男性の「友人」がいても、その行動を変えることは諦め、男性が考える「友人」の定義（互酬的な感情労働もない）を受け容れましょう。あるいは、既婚者な

ら、夫は男性間で友人関係を作れないので、妻が友人役割も兼ねるべきでしょう。さらに、既婚者は、夫との間で感じる感情面での不満を、同性の友人関係で補いましょう。実際、女性は同性間の友人関係からより大きな情緒的満足を得ているものです、と。このことは潜在的には、異性愛関係と結婚制度への挑戦を含んでいると McDaniel はみるが、同時に、感情労働の不平等分配を固定するものとも指摘している⁽¹²⁾ (McDaniel 2003:11-116)。

4 McDaniel の議論に関する幾つかの問題点

4.1 記述された対象の諸水準と問題点

前節では、McDaniel (2003) の議論を紹介するかたちで、白人中流階級における shyness へのまなざしを、関係領域ごと (異性愛関係、職場の人間関係、友人関係) に概観してきた。ここでは、shyness へのまなざし、つまり shyness に関わる感情規則を規定した諸要因・条件について整理しつつ、彼女の議論では曖昧に残された部分も指摘しておきたい。

大きな流れとして、shyness に対するまなざしは肯定的・許容的なものから、より否定的なものへと推移してきたといえる。しかし、McDaniel の議論を振り返ると、まなざされる「shyness」そのものに多義性があり、注意が必要である。まず感じる・感じられる shyness (感情としての shyness) が評価の対象となることがあり、さらに演じられる・装われる shyness (演技としての shyness) がやはり評価の対象となることがある。どちらも肯定的に論じられることもあれば、否定的に捉えられることもある。

また、観察可能な態度・行為のある傾向があり、もっとも中立的な表現でいえば、「黙っていること」(以下「shyness 的行為」と呼ぶ) が、まなざしの“最初”の対象となることがある。これはときに、感情としての shyness の帰結あるいはその表現と解釈されることもあれば、別様の概念で記述される、たとえば meekness (従順さ・温かなこと) や reserve (慎み深さ) として解釈されることもある。後者の場合には、肯定的評価がなされ、前者 (shyness) の場合に

⁽¹²⁾ ここで McDaniel は、自己開示の実態に関する計量的な、あるいは質的な研究を参照して、実際には、自助本でいわれるほどにジェンダー間の差異はないという知見を強調する。男性が自己開示ができないというのはイデオロギーであり、それは結局、男性から感情労働の責務を免除する装置になっていると。“生物学的本質論”をとる議論になると、控えめな男性 (reserved men) という表現をとることで、「shy な男たち」(と解釈される場合彼らが) が自己開示に失敗することで被る、ロマンチックな生活への脅威を回避しようと。

は、肯定的であることもあれば否定的なこともある。もちろん、“shy”としてカテゴライズされたところから後が、shyness 言説（shyness に関わる感情規則）ともいえるわけであるが、“shy”としても解釈されやすい態度や行為が、どのような文脈において、そう解釈されたりされなかったりするのかに注目することで、shyness についての感情規則を規定する社会的諸条件がよりの確に理解される側面はあるだろう。

ことさらにこうしたレベル分けをするのは次の理由による。感情文化・規則として shyness への社会的評価を捉える McDaniel の議論は、理論的には Hochschild (1983 = 2000) の「感情」の「管理（労働）」についての議論に依拠しているとはいう。だが、実際にはその概念の適用対象はかなり緩やかなものとなっているからだ。Hochschild (1983 = 2000) が問題にしたのは、観察可能な行為水準での「感情表現」方法に関わる、つまり印象操作のレベルでの操作・統制に関わるものではなく、そのレベルを通り越して、なにより「感じる」地点にまで達する社会的な介入の姿であり、いわば「内面に土足で踏み込む」ことで達成される統制の存在であったはずだ。Hochschild (1983 = 2000) の訳者でもある石川もまとめているが、「適切な感情状態や感情表現を作り出すためになされる感情管理を『感情労働』と呼んでいる（石川 2000:41）。

しかし、McDaniel が「感情労働」と呼ぶものは、そうした“深層”の感情管理である場合もあるが、他者の自尊心を慰撫したり機嫌をよくさせたりする振る舞い自体に対しても使用されている。そして、感情文化・規則として注意を向けるレベルも、感情レベルばかりではなく、行為や演技のレベルも常に含まれてくる。上述したように、このことを筆者は必ずしも批判すべき問題とは考えない。むしろ、そうした柔軟な記述が必要であろう。

ただし、この記述の柔軟さについて自覚的に論じられている部分がなく、shyness に対する一定のまなざしのあり方が、Hochschild (1983 = 2000) のいう「感情労働」にどのような機序によって及んでいくのかという、重要な論点を度々曖昧にすることに繋がったように思われる。上記の3つのレベルがどのように因果的に結びつけられているのか、まなざされた本人としてはその結び付け方によってどのような対応を強いられるのか、あるいは強いられないのかといったことを論理的水準においてであれ、より明確にしておくことは、「感情労働」についてのリアリティを明らかにするために、必要な課題であった。

4.2 Shyness 言説を規定する主要な諸条件

さて、それでは、3つの対象レベルを含んでいる shyness についての感情規則を左右した社会的諸条件・要因とは、どのように整理できるだろうか。必ずしも上述の概略では全てに触れられたわけではないが、McDaniel の議論で言及された条件を羅列してみよう。相互行為場面の振る舞い方によって、特定階級（および人種）を差異化し正当化しようとする集団的な意図。階級的ヒエラルキーの固定性あるいは流動性。性別規範とジェンダー間の権力格差の正当化。ジェンダー間における感情労働の非互酬性の正当化。モノ作りからヒトを対象とした産業の拡大・優位化。大規模な官僚制組織の発達。組織内のポスト補充原理の変容。女性運動によって促された、アサーティブであること、あるいは自己開示的であることの重要化。性革命による、「自己」発見に対するセクシュアリティの重要化。異性愛関係・友人関係といった“親密な関係”についての意味の変容。メンタルヘルス専門家の権威の増大とセラピー文化の浸透。こうした要因や趨勢が取り上げられていた。

こうした諸条件のなかで中心のもであり、かつ shyness 言説に直接的に影響する条件をある程度抽象化して抽出してみると、ひとまず以下のような構図が読み取れるのではないだろうか。第一に、shyness 的の行為、あるいは演技としての shyness についてみると、主として経済力や「出世」のチャンスの提供能力が規定している、〈支配－従属〉関係が重要性をもつ（この関係に、〈保護－被保護〉関係も含まれることになる）。この〈支配－従属〉関係の固定性・安定性が高いとき、〈従属〉側において、（少なくとも）演技としての shyness が肯定される、あるいは要求される。

第二に、産業構造・組織形態が規定するわけだが、職務遂行上の、他者との対面的な相互行為が要請される頻度や相互行為のもつ重要性が挙げられよう。この点は、Mills (1953 = 1957)、Riesman (1961 = 1964)、Bellah (1985 = 1991) がアメリカの社会的変化を論じるなかで必ず論じてきたことであり、三次産業の興隆と官僚制の進展は、より軽快で軋轢の少ない相互行為を遂行しうるコミュニケーション・スキルを要求する。それはつまり、黙っているような shyness 的の行為を否定的に捉える環境である。

ただし、このことがすなわち、闊達で巧みな言語使用に彩られた会話とその能力が要求されていることを意味してはいないことには注意すべきだろう。50年代における調査を通して、Riesman が強調したのは、同年齢集団という水平的な関係において、他者の言動に注意を払い、その欲するところを読み取りな

がら、決して目立ったり浮き上がったりしないことが、時代的变化によって期待されるようになった人びとの資質であることだ(Riesman 1961 = 1964:17,62-64)。McDaniel の議論も同様のことが 50 年代について指摘されているが、一つ問題があるとすれば、彼女の議論では、一定の態度傾向が、垂直的権力関係において求められる機序と水平的関係において求められる機序とを明確に分けることなく曖昧にしているところだ。

たしかに、50 年代は、上司・顧客に対しても、同僚に対しても、その欲するところを読み取るために「感情としての shyness」は抑制されなければならないとされている。しかし、McDaniel がその理由として強調するのは、上司や顧客を慰撫し上機嫌にさせることが昇進ひいては「成功」するための不可欠の手段であるからということだ。このことは、職務遂行がなによりも他者との円滑な相互行為に依存するという全般的状況からくる、モニタリング能力（集団の中で気後れしているようでは発揮できない）への要求という側面とは、分析的には分けられよう。固定的・安定的な権力関係は演技としての shyness を一貫して支持するが、感情としての shyness を一律に排除するわけではない（植民地時代にみるように）。感情としての shyness を否定的なものとするのは、産業構造・組織構造の変容によって垂直的・水平的関係を問わずに、他者の機嫌に配慮した相互行為が重要視されるようになることと、直接的に関係しているものと考えられる。

第三に、異性愛関係を中心に思念された、親密な関係の理念的意味が shyness の評価と深く関係する。おそらく一つの分岐点は、「相互的な理解」の達成を問題にする、あるいは、しないという地点にあるだろう。「理解」を問題にする場合、ジェンダーに限らず、「自己」の焦点化が同時に、というより前提として存在する。「自己」が強度に意識化されるときにのみ、「理解」が問題化する。そして、相互的な自己開示、傾聴・あるいは相手の自尊心に対する配慮ある行為（こうした振る舞いも「感情労働」になるわけであるが）が要請される。ここでは、演技としての shyness や shyness 的行為も否定されるが、感情としての shyness も否定される。なぜなら、傾聴や配慮が要請されるにせよ、理解を求めて自らを開示し主張しなければならない関係に踏み出すことが、shy ではできないからだ。

ところが、2 節で説明したとおり、男性側にのみ、感情としての shyness や shyness 的行為が肯定されたり許容されたりする。80 年代以降のアサーティブであることの望ましさを前提としている環境下で、このことは矛盾を含んでい

るようだ。しかし、「肯定」するのは矛盾というよりは問題を先送りすることで矛盾化を回避する策である。つまり shyness は自己開示の前提である、「自己」の感情等への気づきがなされるほどの感受性をもっており、関わり方次第で自己開示的になりうる、という論法であった。次に、「許容」するのは、実は「相互的な理解」という親密性についての理念を放棄しているのだから、矛盾はしない。“生物学的”にみて、男性は自己開示が苦手ないし無理であるとする限り、その理念の達成はすでに諦められており、実際、女性は同性間での友人関係で補完せよという指南がなされるわけである。

5 Shyness とメンタルヘルス専門領域

5.1 問題化から医療化へ

本節では、相互行為の領域別ではなく、心理学・精神医学など、とくにメンタルヘルス専門領域と“shyness”との関わり方に注目して、その変遷を概括的に辿ってみよう。実は、自助本の著者にも心理学者は存在するが、割合としてはごく少数である。そのため、もちろん、McDaniel (2003) もメンタルヘルス専門領域との関係について言及しているが、イントロダクションでごく簡略に触れられているに止まる。

McDaniel も論じるように、70年代よりもっばら否定的な意味を付与されるようになった“shyness”は、同時期に心理学の対象とされるが、とくに1990年代中期以降は、「社会恐怖 (Social Phobia)」、つまりは精神医学的診断名称によって把握され、「治療」の対象となってきた。象徴的なデータとして McDaniel が提示するのは、精神医学・心理学関連の文献データベースにおいて、1970年代以降急増する“shyness”についての文献が90年代に入ると減少し始め、かわりに“social phobia”関連文献が急増したことである。心理学的概念が精神医学的概念に吸収される形で“医療化”されたというのが、McDaniel の指摘である (McDaniel 2003:3-8)。以下彼女の議論に筆者からも資料を補足するかたちで、こうした流れをもう少し詳しく記述していこう。

1975年、スタンフォード大学の心理学者 Zimbardo らによる論文「シャイネスと呼ばれる社会的疾患 (social disease)」が、Psychology Today に掲載された。shyness を心理学の研究対象としたものの嚆矢である。2つ大学と1つの高校から800人以上の学生を対象にした調査にもとづく研究であり、出だしは「あるシャイな女子高生」の自由回答から始まる。それは、ダンスパーティーでも自分の足先をみながら一人でじっと座っているしかないといった嘆きの言

葉である。彼らの調査では、40%の学生が自分をシャイな人間であると認識しており、副題の表現を使えば、彼ら／彼女らは「自ら作った文化的牢獄に住んでいる」とされる。「ある状況下では、もともとは単なる不器用な行動であったものが、完全なる引きこもり (total withdrawal) という病理や、苦痛に満ちた孤独な人生へと展開してしまうかもしれない」というように、shyness が人生を“破壊”してしまう危険に満ちたものとして提示されている (Zimbardo 1975:70)。

これ以降、研究は急増していく。まず、1977年に Zimbardo は上述の調査結果も踏まえながら、shyness をテーマにした初の本をまとめている。ところで、この本については興味深い点が2つほど認められる。まず、第2部では、いわば“shyness 克服法”が説かれており、「自己」理解のためのチェックリストから始まり多くの自己診断リストが並べられていることである。つまり、研究書・専門書というより self-help book 的性格が非常に強い。現在までのこの本が出版され続けている所以でもあろうが、shyness への関心のあり方が、より“実践的”なものから始まったことが伺える。次に、イメージ写真ともいべき写真が多用されているが、多くの被写体が女性であることだ。このことは、McDaniel が70年代の転換を、なによりも女性運動におけるアサーティブネスの称揚と結びつけていることと符合しよう。ともすると shyness がより問題とされるのは、積極性（場合によっては攻撃性）を期待されてきた男性の側であるようにも思われるが、少なくともこの時期は、むしろ女性の側について問題化されたことが推測される。

さて、議論を先に進めよう。この後研究は、より“専門化”した形で展開されていくことになる。一定の間隔で論文集形式の研究書が編集されることになるが、2000年代に至までの主要な専門書を並べてみると、ごく簡単に一つの傾向が見てとれる。それは、類似的、あるいは関連的概念が次々と加えられ、かつ入れ替わっていったことであろう。Daly と McCroskey が1984年に編集した本は、『コミュニケーションを回避する：シャイネス・緘黙 (reticence)・コミュニケーション不安 (apprehension)』。Rubin and Asendorpf eds (1993) は『児童期における社会的引きこもり (social withdrawal)、抑制 (inhibition)、シャイネス』。Crozier and Alden eds (2001) は『社会不安に関する国際ハンドブック：自己とシャイネスに関わる諸概念・研究・介入』となる。題名の多様性・変化だけを見ても、またそれらの本で必ず始めの一章、あるいは数章が、複数の概念の腑分けやそれらの間にある関係について細かな議論をすることに当てられていることをみても、かなり錯綜した状態になっていることが分かる。

McDaniel も、多様な関連的概念の存在を指摘しつつ、shyness という概念自体の定義について心理学者の間でコンセンサスがないと述べている。多くの研究はどのような条件で shyness が発生するのかを焦点としつつも、測定尺度が多様化するほどに、あらゆる心的傾向が shyness の対象になってしまうとさえ論じている (McDaniel 2003:4-6)。ただし、彼女の議論からは、どこに論争的な相違が存在するのかは分からないので、現時点で筆者が知り得た範囲で例を提示しておこう。Asendorpf (1990) では、shyness は集団への接近願望と回避願望とが併存するアンビバレントな心的状態とされている。そして必要なのは、SST (social skill training) などの行動療法であると考え。それに対して、Crozier は、自己概念の重要性を説き、「shyness とは脅威を処理する行動システムの問題であり、羞恥と当惑に関わる自意識を含む」ものとする (Crozier 2001:19)。そのため、認知療法の有効性を主張する。

“医療化”についての議論へ移ろう。1980年には Social Phobia (social anxiety disorder) が、診断マニュアルである DSM に含められた。このときの定義は、shyness の「極端な形態」とされ、「(人から試される状況に対して) 持続的で非合理的な恐怖心をもつ、あるいは強迫的な回避願望をもつ」ことが基準とされていた。この基準であると、人口の2～3%が、この恐怖症を有するとされる。しかし、1987年版になると、上述の「非合理的な…」という文章は省略されてしまう。その結果、当てはまる人口は13%程度に急上昇する(実際、鬱病、アルコール依存症に次いで SAD の罹患率は第3位といわれている)。1994年版では、「本人が不合理と認識する…」という一文が加えられ、Shyness と Social Phobia との差異化を図ろうとするが、曖昧に過ぎる。結局、10年前には Shyness だったものが、公式的に「精神疾患」の一つとしての Social Phobia となったというのが McDaniel の見方だ (McDaniel 2003:5-8)。

そして、そのいわば“拡張版” Social Phobia のより脚光を浴びる状況が1990年代に出現する。それが投薬治療の対象となったからである。まず、抗鬱剤であったプロザックを Social Phobia に適用することが認可される。さらに、Social Phobia 専用の薬剤としてパキシルが開発され、治療現場での使用が開始されたのが90年代の後半である。現在、ありうる副作用として、パキシルは自殺念慮を高めることが専門家の間で確認されている。しかし、この薬の導入が Social Phobia への社会的注目をより高めたことは、主要な全国紙の記事をみても伺える。

1998年10月20日付けのニューヨーク・タイムズでは、新薬(パキシル)を

紹介し、Social Phobia の生物学的基礎について解説を加えている。この記事では、Shyness と Social Phobia との重なり具合は不明瞭だとしている点は興味深い。また、さらに、“生物学的”説明として、猿の群れにおける若い雄ザルの話しを引き、shy な男性は母親と恋人によってその傾向を克服できると論じられているのは、McDaniel (2003) の記述した 80 年代以降のバックラッシュ傾向を端的に示しているものとして解釈できるだろう。

ワシントンポスト (2003 年 3 月 7 日付け) でもパキシルを紹介している。この記事では、パキシルの製造会社のホームページを紹介し、「自分の不安が、Shyness なのか、治療を要する Social Anxiety Disorder (SAD) なのか見分けたい人は、サイトにあるドクター〇〇が開発した自己診断テストをやってみるとよいでしょう」と書かれている。ちなみに筆者も試してみたが、一定得点以上になると「あなたは典型的な SAD です。この診断用紙を打ち出して、早急に専門家のもとへ行きましょう」といった“指南”がなされていた。

また、2001 年 5 月 1 日付けのニューヨーク・タイムズの書評欄では、“Painfully Shy: How to overcome Social Anxiety and reclaim your life”という自助本が取り上げられており、shyness もひどくなると、鬱や薬物乱用、さらには自殺にもいたる苦痛をもたらすと切り出し、この本の有用性を訴えている。ここで重要なのは、この種の本が有名紙で取り上げられていることであり、さらにその本が、Shyness と Social Anxiety とを一直線上に並べていることだ。Shyness とその程度において明瞭な区分もない Social Phobia あるいは SAD が薬物療法の対象とされることで、実体としてどのレベルまでが疾患化されるようになったとはいえなくても、一般の人びとが“Shy”として自らを一旦意識すれば、それが“治療”を要請するレベルであるのか否かという不安は確実に亢進するだろう(上記のワシントンポストの記事がそうした不安を高める装置の好例だ)。その不安は専門家へのアプローチを促し、疾患としての診断を受ける可能性を高める。その状態が、“Shyness”と“Social Phobia”あるいは“SAD”との社会認識的な距離を、さらにきわめて短いものにしていくことは十分に考えられることではないだろうか。

5.2 親密性をめぐる意味的変容とセラピー文化

さて、こうして“shyness”が、メンタルヘルス専門家により治療される対象となり、とくに精神医学的な疾患へと近づけられ、あるいは組み込まれてきた条件について考察しておこう。McDaniel は、Shyness についての言説研究を

終える部分で、この趨勢について二つの流れが条件となっていることを指摘する。一つは、4.2節で述べた親密性についての意味的変容にともない、親密な関係を形成するために、より一層複雑なコミュニケーション・スキルが要請されるようになったことである。70年代、そしてとくに80年代以降、求められたことを、McDanielは次のようにまとめている。「我々は感情を抑制していることを示しつつ、自己と自らの欲望のために率直に話さなければならず、同時に他者の欲求と欲望を考慮し、さらにそれらと自らの欲求・欲望を調停しなければならない」。こうした複雑な要求をうまくマネジメントできないようにみえる多くの人びとを、心理学者たちは“シャイな人”としてきた(McDaniel 2003:122)。

そして、もう一つの条件とは、まさにそうして名付けるメンタルヘルス専門家の生活諸領域に対する発言力の伸長である。親密な関係の形成に求められる複雑な要求を統御することの困難が、「対人関係のマネジメントに関する問題」とはいわずに、「恐怖症」とラベルを貼られたのは、そうした専門家たちの影響力の大きさを示すものとMcDanielはいう¹³⁾。ここで彼女は、De Swaan(2003)の“広場恐怖症”(agoraphobia)の研究を参照する。

19世紀から20世紀への転換期間に、中流階級の女性に対する社会規範の変化が生じ(外出・移動の自由度の上昇)、それが当時の一定数の女性たちにある種の不安を与えた。同時期に出現してきたサイコセラピーの専門家たちは、その不安を理解する語彙(広場恐怖症)を提供したのである。この語彙が、新たな社会的ルールになじめない女性たちを、心理学者による治療に相応しい心的問題を抱えた存在へと転形させた。これがDe Swaan(2003)の議論の骨子であるが、感情文化を含む社会的規範の急激な変化がある種の人びとを戸惑わせ、そしてその戸惑いに名前をつけ、処遇する“権利”をもつ集団が存在するという構図は、そのままSocial Phobiaに当てはまるというのがMcDanielの考えである(McDaniel 2003:122)。

確かに、よく指摘される通り、アメリカ社会におけるメンタルヘルス専門家の影響力は非常に強いものである。たとえば、Cohen(1983)は、20世紀初頭

¹³⁾ McDanielは(そして筆者も)、“医療化”自体を批判しているわけではない。進藤(2003)は、医療化批判は、「問題の個人化」と「患者の脱(政治的)主体化」という二つの論点から成り立っているが、問題の完全なる「社会化」の不可能性、病者役割から生じるメリットの無視が孕む独善性という二つの批判点があることを指摘している。McDanielが問題にしているのは、こうした医療化の趨勢が特定の人格——外向的・社会的で、自己主張を強くする人格——を個々人が努力して目指すべき理想的な人格として人びとにイメージさせ、抑圧的に作用することである(McDaniel 2003:8)。筆者もこの点に同意する。

から教育現場を対象に展開された精神衛生学運動 (mental hygiene movement) を取り上げている。彼によれば、この運動は、20 世紀中期にいたるまでに、教育の第一義的な目的は学科教育ではなく、十全なる人格を形成することであり、そのためには精神医学的な知識に基づく教育プログラムが必要であるという主張を、公式的で支配的なものにすることに成功している。

あるいは、Bellah (1985 = 1991) が、セラピー文化はアメリカの個人主義における一側面をいわば純化した形態であることを指摘しているように、アメリカにおけるメンタルヘルス専門家の影響力は、歴史的に展開されてきた運動やもともとの文化的土壌と相まって強化されてきたことが伺える。そのことが意味するのは、社会規範上の変化と命名する集団の営み・影響力とを、もはや簡単には弁別できないほどに、両者は入り組んでいることであろう。McDaniel も、70 年代におけるアサーティブであることの称揚が、性革命や女性運動ばかりでなく、その 30 年ほど前から臨床心理学者が激増してきたことに現れているセラピー文化の日常生活への浸透と関わっていると指摘している (McDaniel 2003:17-18)。

メンタルヘルスについての社会学的アプローチを類型化した Horwitz は、構築主義的研究の近年の傾向を次のように評している。「最近の構築主義的研究は、精神疾患の専門家による構築を自己ラベリングという素人の過程 (lay process) と繋げていない。精神疾患の解釈と分類についてのシステムが社会的文化的諸力の結果として興隆し変化する、そうしたメカニズムについての顕著に社会学的な説明は創出されていないのだ」と (Horwitz 1999:70)。ここまで、“Shyness” が心理学的研究の対象とされ、さらに “Social Phobia” あるいは “SAD” といった精神医学上の疾患名へと近づけられ、組み込まれていく趨勢を辿ってきたが、McDaniel (2003) の議論は、こうした Horwitz の批判的要望にある程度は応えているものといえよう。ただし、筆者も多少はメディア・テキストを補足したが、「素人の自己ラベリング」についての記述・分析は含まれてはいない。この点も今後の課題となろう。

また、この問題に関連して、この“医療化”の趨勢とジェンダーとの関係についての McDaniel の議論に残る疑問を一つだけ示しておこう。彼女によれば、80 年代以降、男性における shyness は感受性が豊かな証左であるという議論 (自助本の 18%)、あるいは自己開示的になれないことは“生物学的”に規定されているといった議論 (自助本の 30%) があるという。つまり、約 50% の自助本についてみれば、男性における感情としての shyness も shyness 的の行為も、ある程度許容される余地があると考えられよう。だからこそ、McDaniel は、結局、

そうした男性を相手に感情労働をしなければならないのは女性のままであると批判的に指摘したわけである。

しかし、たとえばニューヨークタイムズ(1998年10月20日付)では、Social Phobiaは女性にやや多いが(これはつまり何らかの疫学的調査にもとづくものと思われる)、診察に訪れるのは男性に多く、それは強度のShynessを、社会は男性に対しては許容しないからだと論評されている。この記事情報の信頼性には限定も必要であろうから、McDanielの議論を全面的に否定することはできない。しかし、他の部分ではその時々意識調査などを引用していたにも拘わらず、McDanielが、こうした診察場面に現れる人びとのジェンダー構成などについてのデータをなんらか提示していなかったことはいささか不可解である。一定のデータセットにおける言説的比重を確定するとともに、社会成員の行動傾向も含めて論じたときに、その時期において支配的な感情文化・規則がより明瞭になり、同時に、上述した専門家言説と、“素人”の日常における解釈的行動との関係性も洞察できることになるだろう。

6 おわりに

本稿は、アメリカ社会におけるShynessへのまなざしが、つまり関連的な感情文化・規則が変容してきたことを捉えたMcDaniel(2003)の研究を紹介しつつ、その問題点と展開しうる論点を抽出することを主たる課題としてきた。また、その一部に含まれる作業であるが、Shynessがメンタルヘルス専門領域において明確に問題化され、やがて医療化された過程にもとくに注意した。この際、メンタルヘルスを対象とした社会学のありうるアプローチのバリエーションを紹介しながら、扱われることの少なかったShynessというトピックが現時点でどのように分析されきたのかにも言及し、ライフコース論における研究例を紹介した。

こうした一連の作業を行った背景的な関心を振り返れば、一つには対面的な相互行為において期待される振る舞いの様式とその時代的変容というテーマがあった。とくに、近年の日本社会において、より積極的な相互行為への参加を、そしてある種の“コミュニケーション・スキル”の獲得を要請する社会的傾向に注目するとき、一般に自己主張を強く求める社会といわれる北米社会において、shyであるということがどのような評価と処遇を受けてきたのかは興味深い問題に思われた。これまで、Mills(1953 = 1957)、Riesman(1961 = 1964)、

あるいは Bellah (1985 = 1991) によるアメリカ社会についての著名な社会学的研究は邦訳されているが、より社会的で闊達なコミュニケーションを求めるようになった背景やその意味は、概ね労働領域との関連で論じられてきたといえよう。それに対して McDaniel (2003) の議論は、とくに親密な関係性についての意味的な変容と、そこで必要とされる感情労働とに照準している点でユニークなものであった。

この点は、日本社会についての研究を考えるときにも重要な視点を提供してくれるだろう。日本社会についての関連的な研究蓄積を振り返ると、若年層の交友関係について、その関係の断片化などを指摘する議論は多い。しかし、成人期以降の（異）性愛関係に関わる、あるいは友人関係に関わる親密性に付与される意味内容の点から、いかなる感情労働が求められるようになったのか、あるいはそれがジェンダーという分割線にそってどのように配分されているのかといった観点からなされた本格的研究はあまりないのではないだろうか。そもそも、日本のコミュニケーションに関わる研究では、職場も含め成人期以降の層を対象にしたものは、いわゆる日本文化論的な評論を除いて、実はほとんどないように思われる。上記のような社会生活上のアスペクトが関心をもたれないとすれば、それはまた一つの“文化的”な差異として論点になるかもしれない。が、近年の小説その他の文化的テキストを一瞥すれば決してそうとも考えられない。そうであればより本格的な質的研究が待たれているのかもしれない。

背景的な関心としてはもう一つ、メンタルヘルス専門領域と相互行為に関わる規範との、あるいは感情文化との相互的な関係というテーマが存在した。その観点からも、McDaniel による shyness についての研究は、方法論的な支えをもった規範の記述を着実に行っていることにおいても、きわめて示唆に富む研究例を提供している。ただし、たとえば 1970 年代における感情文化・規則の劇的な変動の背景として「自己」概念のもつ意味的比重の変化に言及しながら、その部分の議論はいたって淡泊なものである。その主たる分析対象が shyness 言説にあったとはいえ、たとえば Bellah (1985 = 1991) などに比べれば、その踏み込み方はいたって浅いものであった⁽¹⁴⁾。

⁽¹⁴⁾ Bellah (1985=1991) の研究は、Giddens (1991=2005) などより早く、後期近代社会における「個人化」の問題を実質的にとり上げ、そこにおける「自己」の困難を正面から見据えたものといえるだろう。Bellah (1985=1991) の訳者である島齒は、「個人化」社会における宗教の現在の位相を捉えた論文において、やはり Bellah (1985=1991) を個人化論の一つとして位置づけている (島齒 2004:432)。

しかし、この点は、後期近代社会における「自己」の問題を核として、メンタルヘルス専門領域と相互行為あるいは感情に関わる規範・規則との関係を分析する視角として、きわめて重要な位置にあるように思われる。実際、Giddens (1991 = 2005) が、後期近代社会における自己アイデンティティについて論じるなかで、いみじくも心理学者の書いた自助本を補助線としながら、親密な関係の困難に論及している。これらの議論における諸概念の関係については、今後精緻に検討しなければならず、さらに日本社会への適用については様々な限定・調整も必要とされよう。しかしながら、この部分に、関連的趨勢を読み解く一つの鍵があることは、やはり間違いのないように思われるのである⁽¹⁵⁾。

[参考文献]

- Asendorpf, Jens B., 1990, "Beyond Social Withdrawal." *Human Development*, 3:250-259.
- Bellah, N Robert., Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton, 1985, *Habits of the Heart*, University of California. (= 1991, 島蘭進・中村圭志『心の習慣』みすず書房.)
- Biggart, Woolsey Nicole., 1983, "Rationality, Meaning, and Self-Management: Success Manuals, 1950-1980." *Social Problems*, 30(3):298-311
- Brown, W George and Harris Tirril, 1978, *Social Origins of Depression*, Free Press.
- Caspi, Avshalom., Glen H. Elder, Jr and Daryl Bem., 1988, "Moving away from the world: life-course patterns of shy children." *Developmental Psychology*, 24(6)824-831.
- Cohen, Sole., 1983, "The mental Hygiene Movement, The development of Personality and the school: The Medicalization of American Education." *History of Education Quarterly*, 23(2):123-149
- Clausen, John S., 1991, "Adolescent Competence and the Shaping of the Life Course." *American Journal of Sociology* 96:805-842.

⁽¹⁵⁾ 本稿では、とくに心理学の領域でShynessの定義や、それが生起する機序についての研究などについては、ごく限定的な論じ方しかなかった。しかし、日常生活局面での解釈行動に、専門家言説が影響する側面を考えるにしても、専門家言説についてより丁寧な議論が必要であろう。今後の課題としたい。

- Collins, Randall, 2004, *Interaction Ritual Chains*, Princeton University Press.
- Crozier, Ray., 2001, *Shyness*, Routledge.
- Crozier, Ray W., and Lynn E Alden. eds., 2001, *International Handbook of Social Anxiety: Concepts, Research and Interventions Relating to the Self and Shyness*, John Willy & Sons.
- Daly, John A., James C. McCroskey, Joe Ayres, Tim Hopf, and Debbie M. Ayres. eds, 1984, *Avoiding Communication: Shyness, Reticence, and Communication Apprehension*, Hampton Press.
- Elder, Glen H Jr., 1974 = 1986, *Children of The Great Depression: Social Change in Life Experience.*, The University of Chicago Press.
- Eller Jackie L., 2005, “Book Review.” *Social Forces*, 83(3):1306-07.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity*, Stanford University Press. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press. (= 1980, 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠心書房.)
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc. (= 1970, 石黒毅訳『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- Goffman, Erving, 1967, *Interaction Ritual: Essay on Face to Face Behavior*, Anchor Books, Doubleday and Company Inc, New York. (= 2002, 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為〈新訳版〉』法政大学出版会.)
- Hochschild, Arlie, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, The University of California Press. (= 2000, 石川准・室伏亜希『管理される心』世界思想社.)
- 本田由紀, 2005, 『多元化する『能力』と日本社会：ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.
- Horwitz, Allan V., 1999, “The sociological study of mental illness.” Aneshensel & Phelan edit, *Handbook of the sociology of mental illness*, Kluwer Academic / Plenum Publisher, New York.
- 石川准, 2000, 「感情管理社会の感情言説：作為的でも自然でもないもの」『思想』907:41-61 岩波.

- Kerr, Margaret., William W. Lambert and Daryl J. Bem., 1996, "Life course sequelae of childhood shyness in Sweden: Comparison with the United States", *Developmental Psychology*, 32(6):1100-1105..
- McDaniel, A Patricia., 2003, *Shrinking violets and Caspar Miloquetoasts: shyness, power, and intimacy in United States, 1950-1995*, New York University Press.
- Mills, Wright C., 1953, *White Collar: The American Middle Class*, Oxford University Press. (= 1957, 杉政孝『ホワイト・カラー』東京創元社)
- Riesman, David, 1961, *The Lonely Crowd: A study of the changing American character*, Yale University Press. (= 1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房)
- Rubin, Kenneth H., and Jens B. Asendorpf., 1993, *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood*, Lawrence Erlbaum Associates.
- 島藺進, 2004, 「社会の個人化と個人の宗教化: ポストモダン (第2の近代) における再聖化」『社会学評論』54(4):431-448
- 進藤雄三, 2003, 「医療化のポリティクス: 『責任』と『主体化』をめぐる」『現代の社会病理』18:1-14.
- Shanahan, Michael J., Glen H. Elder, Jr. and Richard A. Miech., 1997, "History and Agency in Men's Lives: Pathways to Achievement in Cohort Perspective." *Sociology of Education*, 70:54-67
- Zimbardo, G Philips., Paul A. Pilkonis., and Robert M. Norwood., 1975, "The social disease called shyness." *Psychology Today*, 8(12):68-72.
- Zimbardo, G Philips., 1977, *Shyness: What it is, What to do about it*. Perseus Book.

謝辞：筆者は2005年9月より8ヶ月間、静岡大学教員特別研修制度の支援を受け、アメリカのノースカロライナ大学にて研究を行う機会をえました。本稿はその期間に着想を得た研究の一部になります。在外研修中にご迷惑をおかけした教員のみなさまに感謝いたします。また、2006年7月27日には研修報告会を行いました。出席頂いた社会学科教員の方々からは大変有益なコメントを多く頂きました。現時点ではコメントを生かす段階まで達しておりませんが、ここに記して感謝いたします。